
ブレイブ・ウィル

カイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブレイブ・ウィル

【Nコード】

N7297M

【作者名】

カイト

【あらすじ】

十五年前、全生命が絶滅の危機に陥った戦争があった。だが義勇軍の活躍によりその戦争は終結した。そして、これはその義勇軍のソートップの間に生まれた子供の物語である。

始まりの夜

「はぁ……はぁ……」

私は走った。

ただひたすらに。

ただでたらめに。

ただがむしやらに。

雨が降り注ぐ夜の中で追いかけてくる何かから逃げるために。
ボロボロになりながらも絶対に勝てないとわかってるから…
逃げることだけを考えて走り続ける。

「こ、ここまで来れば……」

そう思ったときだった。

ドスン

と私を追っていた化物が空から降ってきたのだ。

「ヒッ……！」

「……………」

音もなく蠢いて迫って来る化物にどうしよもなく立ち竦んでいたら
「おうおうおう、その化物さんよお？ 人ん家の前でなにやってんだ？」

男の人が立っていた。

体つきがよくスタイルもいい人だったが化物の前には誰も勝てない。
い。

誰も瞬間の内に蹂躪され無残に食われてしまう。

「ダメッ……逃げて……！」

しかしそう言った時に化物はもうその人に飛び掛っていた。

その人は何かを構え。

一瞬で勝負がついた。

そして私の意識は闇に落ちていった……

「ん…んんっ…」

「あれ？　ここは？」

気がついたらそこは見知らぬ部屋だった。

「ん？　おお、起きたか？」

「あっ！　あなたはっ！」

そう叫んでベッドから立ち上がりかけた時に気づいた。

私は今服を着ていなかった。

「……………」

「……………」

沈黙。

沈黙。

沈黙。

そして。

「キヤアアアアアアアアアアア！」

「ぶふう！」

ビンター閃。

命の恩人からただの変態ヘランクダウンだった。

「今、悲鳴が聞こえましたけど……ああ、とりあえずこれをどうぞ」

入ってきた優しそうな男の人は自分の着ていた上着を脱いで私にくれて、肝心の私の命の恩人はというと…完全に床にのびてしまっていた。

こんな感じで私達の出会い方はいろいろと酷かった。

「私の名前は篠山　茂です。そしてこちらが荒尾　戒君なのですが

……………」

さつき私に上着を着せてくれた篠山さんはすごくスタイルがいい人だった。

細身で尚且つ長身……どうせ私なんて……

そして私を助けてくれた恩人：もとい荒尾 戒は以外にも歳は私と同じくらいだったが、ずっと呆然としていた。

篠山さん曰く。

「戒君は、女の子にぶたれた事なんてありませんからね」

と苦笑しながら話してくれたが悪いことをした気分だ。

「そういえばあなたの名前を聞いていませんでしたね。なんて名前なんていうのですか？」

「私ですか？ なぜか育ててくれてた人と名字が違うんですけど宮ノ坂 瑠璃です」

「宮ノ坂…！」

「え？ な、なにかいけませんでしたか？」

「いえ、なにもいけない事などありません」

そいつって篠山さんは膝を付いた。

「さ、篠山さん？ いったいどうしたんですか？」

「宮ノ坂瑠璃様、これまでの無礼な言動をお許してください」

「え…あの…とりあえず話がまだ理解できてないので一から説明してください」

「そうですね…失礼いたしました。」

私がそういうと篠山さんは顔を上げて話してくれた。

「瑠璃様は十五年前に起こったあの戦争のことを知っていますか？」

「私を追っていた化物がこの大陸に攻め入って来た時のことですね」

「はい、あの化物…『ベイメント』によって全生命が絶滅に陥った戦争のことです」

「その事件が私と関係あるんですか？」

「はい、『ベイメント』は未だ誰も知らないような所から攻め入って来たせいで我々は何の迎撃も出来ませんでした、しかし力がある者を中心とした義勇軍によって『ベイメント』のリーダーが攻め込んで来た時にそのリーダーを倒すことによって戦争は終結しました」

ここまでは私になんの関係性もない話だと思っていたが、次の篠

山さんの一言があまりにも衝撃的で私に関係があった。

「そしてその組織のツートップが瑠璃様のご両親……つまり宮ノ坂琥珀様、翡翠様なのです。いや……正確にはツートップでした」

今、篠山さんはなんて言った？

私の両親が全生命を救った軍のツートップ？

さすがに信じられない。

いや……信じたくなかった。

「……それは……本当なんですか？」

「ええ……私もその軍にいましたから」

「……私の両親は死んだんですか？」

「死んだところは見ていませんが、琥珀様と翡翠様が瑠璃様を産むために居た病院が崩壊しその跡地に残されていたのは産まれたばかりの瑠璃様だけだったと同僚から聞きました。」

「本来なら私達が責任を持って面倒を見るべきだったのですがその同僚が病気で死んでしまい彼の家族が自分の親戚に預けたのです、たぶんその方が今まで瑠璃様を育ててくれていた人だと思いますが……心配の種は尽きませんでした」

「しかしこうして無事に出会えてよかったです……」

「……篠山さん、ひとつ聞かせて下さい」

「なんででしょうか？」

「私の両親は……お父さんとお母さんは立派な人でしたか？」

「それは……もちろんです」

「そう……ですか……」

「瑠璃様？」

「すみません……ちょっとの間……泣かせてください……」

「えっと……その……さつきは泣いてしまつてすみませんでした……」

「いえいえ、気にしないでいいですよ」

「茂さんはさすがだなあ」

さっきの話の時泣いてしまった私を茂さんは泣き止むまで頭をなでて待っていてくれた。

そうこうしている内に戒も気を取り戻して、現状に至るわけだが……戒にだけは泣いている姿を見られなくてよかったと心のそこから思っていた…。

「さて、そろそろ本題に入らせてもらいますが瑠璃さん、戒君、よろしいですか？」

「はい」

「もちろんですよ！」

篠山さんに様付けで呼ばれるのが嫌というかむずがゆくあったので普通に呼んでくれるように頼んでみたが、結果は一時間かけて瑠璃さんと呼ばれるところまでだった。

「まあ様よりかはましだからよしとしよう。うん、そうしよう。そして立ち直った戒の方はというと…」

「ねえ、戒？」

「…ッ！ お、おどうかしたか？」

「本題っていったい何の話しなんだろうね？」

「す、少なくとも俺は知らねえぞ？」

なにやらあのビンタが妙な恐怖心を植えつけてしまったらしい。

こちらが悪いとは思ってない、譲っても五十歩百歩だったと思うがこんなだとこっちのほうが対応に困って仕方がない。

「そこ？ イチャイチャしてないで話を始めますよ？」

「「イチャイチャなんてしてないです！！」」

くっ…悔しいけど被ってしまった…。

そんな事を思っている間に篠山さんが話し始めた。

「まず、私と戒君は宮ノ坂夫婦と一緒に戦った篠山 創華と荒尾 縛の子供達です」

「そして瑠璃さんは前対戦で英雄となった宮ノ坂夫婦の子供」

「ここまで条件がそろったのならまた力を取り戻してきた『ベイメント』達相手に戦うのもまた一興ではありませんか？」

と篠山さんは微笑みながら私達を見てそういった。

「よっしゃあ！ やってやりましょう！！」

「えー？ ちょ、ちょっとまってください！」

もちろん私は戦えるはずもないので戦う気満々の篠山さんと戒を止めに入った。

「えー…どうしたんだよ…」

「だってあんな化物と戦うわけでしょ？ 篠山さんや戒ならまだしも私が勝てるはずないじゃない」

「いや？ 勝てるぞ？」

「え？」

最初戒の言っている意味がわからなかったが思考が追いついた。

私が『ベイメント』に勝てる？

そんなことが実際にできるのだろうか…。

私が疑問に思っていると篠山さんが口を開いた。

「瑠璃さん、実は戒君の言うとおりで『ベイメント』に勝てる力を貴女は秘めています」

篠山さん曰く宮ノ坂の血の中にはとてつもなく強い力が宿っていて私が今まで使わずに過ごしてきただけらしいのだ。

「琥珀様の話によるとその力は何かを強く願うことで自由に使えるようになるらしいのですが…残念ながらそこまでは聞かされてないです…もうしわけございません」

「いやいや、気にしないでください。でも私武器なんて使ったことないですよ？」

「その点については彼女に武器の設計、開発を頼めば…」

「彼女？」

「もしかして、円のことですか？」

「そうです、瑠璃さんは『仁王コーポレーション』を知っていますか？」

「ああ…あの今の社会の発展に欠かせなかったと言われている…」

「ええ、その社長の仁王 工機の娘ですよ」

……え？

「ええ！？ な、なんで知り合いなんですか！？」

「ああ、それは私と工機が幼馴染だからですよ」

「そんな人と幼馴染なんですか！？」

知り合いというだけでも相当驚きだというのにそんな人と幼馴染だなんて……

「あれ？ 幼馴染ってことは歳も同じですよ？ 篠山さんは何歳ですか？」

嫌な予感が拭いきれない……まさかとは思うがここまで外見が若々しいなら……

「お恥ずかしながら今年で三十路になってしまつのですよ」

篠山は苦笑して言つたが私は呆然とするだけだつた。

二十九で一大企業の社長をやっている人物の娘に会いにいくだけでなくその社長と幼馴染の人と知り合いにまでなつてしまつている『ベイメント』が私を襲うようになってきて育ててくれてた宿屋のおばさんに迷惑かけたくない一心で飛び出てきただけなのに……

……はあ……私の平穏な日々は何処に行つちやたんだらう……。。

「おい？ 瑠璃？ 聞いてるか？」

「……何よ？」

「いや……急に黙り込んだからどうしたのになつてな」

「ふ……大丈夫よ、何か大切なものが色々と崩れた以外はね」

「？ まあ大丈夫ならいいんだ」

「とりあえず話を戻しますね？」

私が色々と落ち込んだのから回復したのを見計らつて篠山さんが話を再開し始めた。

「明日あたりに円さんに会いに行つて瑠璃さん用の武器を作つてもらおうと言つわけです」

「作つてもらふのはもうこの際いいんですけどその円さんはどこに住んでるんですか？」

「隣の要塞都市『フォードヒルズ』だな」

ちなみにこの大陸のことを軽く説明しておく。と三つの地域に分かれていて、私が育った場所でもあり今いるこの地域がさっき名前が出た『フォードヒルズ』を中心に攻めにくく守りやすい地形のおかげで昔から栄えてきた地域が『ヒュールピス』。この地域に住むものは私達みたいなごく普通の体系をしている。もっともあの戦争での幹部格のような特別な力を持つ人もいるらしいが、話を聞く限り今はまだ私も含めて篠山さんと戒の三人しか知らない。

次は天空都市『カプワ・ラング』で歴史的な学者が領主としてやって来た地域が『スクールニティ』だ。この地域で栄えた人たちには先天的に翼が生えており基本的には学者肌の人間が多いのが特徴だ。そして山岳都市『ストラルフ』に住むドワーフとドワーフに作られたゴーレムが主な種族である地域が『アースゲイル』。技術は三地域の中でどこにも引けを取らないが今まで聞いた話によるとドワーフは人との協調性がなく慣れてしまった人でないとその地域に住むのは辛いそう。

「では、明日の早朝には出発したいと思いますので、今日はゆっくり休んでください。」

「わかりました」

「了解です」

私達にそういうと篠山さんは電話を取り出してどこかへかけ始めた。

『もしもし、円さんですか？ 変わらずお元気な様で何よりです』などと言ってるあたりからやはり幼馴染の娘だけあってやはり仲も良いんだなあと思つてると不意に方をつつかれた。

私が疑問に思つて振り返ると戒が気まずそうな顔で頭を掻いていた。

「ああ……なんだ？ その、さっきは悪かったな」

ここで服の事に関する謝罪が来るとは思つてなかったので私は面

食らったような態度になりながらも言葉を返した。

「あ……いや、私もあれはいけなかったからって思い始めてたんだけど……」

「いや、いくら服がボロボロだったとしてもせめて何か別のものを着せてやるべきだった……ホントわりいな」

ここまで言って戒がうな垂れてしまった。んー……いくら気が動転してたとはいえやつぱあれはやりすぎだったかー……と思った私は戒に手を差し出した。

「……？」

「仲直りの握手、ってとこじゃダメかな？」

戒が不思議そうに見てたので私が説明すると一転したように顔を輝かせた。

「いや、これからよろしく頼むぜ」

「こちらこそ」

戒が私の手を取ろうとして近づいて来た時に戒がなぜか何も無いのにつまづいて……

「うわっ！ー！」

「え？」

むにゅ

その手は私の胸へと吸い込まれていった。

「……………」

「……………」

沈黙。

沈黙。

沈黙。

そして。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア！ー！」

「げふう！」

どうやら仲直りは遠い道になりそうだった。

初陣

昨日の夜、あんなことがあったが私達は今『フォードヒルズ』に向かう列車の中にいる。……しっかしあの後戒を元に戻すの大変だったなあ……。

そして大企業の娘に会いに行くわけだから私は不安が一杯の中この列車に乗っているのに彼女のことをしっている二人はというと……。

「ねえ茂さん？ たしか六時間ぐらいかかりましたよね？」

「そうですね、正確にはもう少しかかるとは思いますけど」

「まじッすか、じゃあ俺寝ますわ」

「戒君が寝るのですしたらそうですね……私は展望台に行つて外の景色を見てこようと思いますが瑠璃さんはどうしますか？」

「すっごいリラックスしていた！」

まあ会ったことあるから緊張しろって方が難しいのかもしれないけどこんな緊張してる私が馬鹿みたいじゃない……。

普段住んでいる世界があまりに違うことにショックを受けつつも私はなんとか返事をした。

「私はせつかくなので初めて乗った列車の中を回ってみたいと思います」

「そうですか、ではくれぐれもお気をつけて行動してくださいね」
「わかりました」

こうして私は戒と篠山さんと別れてから一人列車の中を回っている。

初めて乗った列車だから見るもの全てが新しく楽しかったが同時にになにか物足りなさも覚えていた。

たぶんそれは……話し相手がないことだった。

でも展望台に出るのは怖いし戒は寝てるしどうしようかなあ……。

などと考えながら歩いていたら不意に服の裾が引つ張られた。

「……………」

私が疑問に思っ振振り向くとそこには小さな女の子がいた。

「……………」

その女の子はなにを思っているのか私の服の裾を掴んだまま俯いていた。

「ん？　どうかしたの？」

視線の高さを同じにするためにしゃがんで聞いてみた。

だが視線を合わせてみて一つわかった……この子今にも泣きそうだ！！

「……………ぐすつ……………おか……………うわあああああん！！」

そして危惧していたこと…………泣き出してしまった！

私は必死に落ち着かせようとしたが幼い子供なのであやした事もない私が落ち着かせようとした所で落ち着くはずもなく…………。

「おかあさあん！　うわああああああん！！」

「一旦落ちつこ？　ね？　お願いだよー！！」

空しく私の声が響くだけだった。

長い時間をかけなんとか落ち着かせれたのだが、それでもまだ少し泣いていて話を聴ける状態ではなかったのでもう少しゆっくりしつてようやく落ち着いてきて今から事情を聴くところだ。

「えつと？　まず名前はなんて言うの？」

「わたしのなまえはねえ、ねむろりおんだよお」

ねむろりおん……………という漢字で書くんだろつ……………さっぱり検討も付かない。

でも私も人のことを言えないけど珍しい名字だなあ。

「それでりおんちゃん、もしかしてお母さんとはぐれちゃったの？」

「うん……………」

「そっか……………じゃあ一緒に探しに行こっか？」

「うん！！」

りおんちゃんを安心させるためにそういつて探し始めたがこの列車での人探しは簡単じゃない……いや、むしろ難しいとしか言えなかった。

なにせ車両数が二十両も有るのだ。

しかも篠山さんが言うには基本的に満員に近いらしく、今日も例に漏れずぎゅうぎゅう詰めだった。

さらにりおんちゃんと出会った場所が十両目……つまりど真ん中のスタートだった。

「さて、どっちに行こう……」

まあ考えた所で何処に居るのかもわからない上にどっちに行っても逆方向に戻らないといけないからどのみち同じなだけ。

「どうしよっかな、ん？ りおんちゃんどうしたの？」

「こっちにいくの」

そう言うとりおんちゃんはとてと歩いて行ってしまった。

子供らしいというかなんというか……自由に生きてるなあ。

「あ！ ちょっと！」

そうしてりおんちゃんが先に行きその後を私が歩くというよくわからない並びで一番設備が貧相な車両まで行ったのだが。

「見つからなかったね」

「うん……」

「気を取り直して反対側に行ってみよっか」

「うん！」

そうして私とりおんちゃんを歩き出したけどなぜかりおんちゃんが急に動きを止めた。

「りおんちゃん？」

「なんかへんなおとがする」

「……………ホントだ」

りおんちゃんに言われて私もようやく気がついた。

なにかが軋むような音が微かに聞こえるのだ。

他の乗客たちも気がついたみたいで辺りを見回したり、顔を見合

わせている。

上から音がするから確認しようと思ったのか窓際の席にいた人が窓を開けて上を覗き込んでいて、

ビチャ。と音がした。

なにかと思つて私は音をした方を向いて……絶句した。

そこには辺りに撒き散らされた血と無残にも首から上を食いちぎられた人と……『ベイメント』がいた。

「……ッ！ りおんちゃん！」

「わ！ わ！ おねえちゃんどうしたの！？」

「いいから早く！」

私は考えるよりも早くりおんちゃんの手を取つて駆け出した。

私達は元の道を戻ろうとしてる途中だったのでその車両からはなんとか逃げられたが後ろを振り向くとたった一匹の『ベイメント』によつてその車両の人はほぼ全員食いちぎられていて元は白かった壁や床が真っ赤に染まっていた。

戒と合流することができればこの状況でも大丈夫だ……だから一刻も早く……。

だがそんな事を考えながら走っていた矢先にりおんちゃんが転んでしまった。

「……ッ！ りおんちゃん！！」

私はりおんちゃんを起き上がらせようとしたけどいつの間にか『ベイメント』が目の前にいた。

逃げるのが間に合わないと思つたから鈴ちゃんを守るように『ベイメント』に背中を向けて床に倒れこんで来るべきに痛みを覚悟していたけど……いつまでたつてもその痛みは訪れなかった。

不思議に思つて顔を上げるとそこには、

「なんとか無事みたいだな」

「……はあ……ま、おかげさまでね……つて他の車両は大丈夫なの！？」

「ん？ ああ、大丈夫だろ。この『ベイメント』は基本十、二十の

群れで行動するんだが一体しか追ってきてないだろ？」

「うん、そうだけど」

「なら展望台にいた茂さんが異変に気づいて全部打ち落としにかか
つてるはずだぜ」

まあ、もうすぐ終わるだろうから待つてろよ。と戒が付け加えて
からそう立たない内に窓の外から奇妙な鳴き声が聞こえなくなった。

そこから先は列車に救助隊が来てまだ少しでも息のある人を助け
たりりおんちゃんの親を見つけて別れを告げたりしてから篠山さん
と合流して『フォードヒルズ』に向かって出発した。

そして本来の到着時間より一時間ほど遅くなったが今、円さんが
住んでいるという『フォードヒルズ』の最下層の貧困エリアの入り
口にいた。

「なんで円さんは社長の娘なのにこんな所に住んでるんですか？」

「ああ、あいつのことですからたぶんあの理由だと思いますが……

それは本人に聞いたほうが早いでしょうね」

「そうですか、わかりました」

「おい、とつととあいつの家に行こうぜ」

「そうですね、では付いてきてくださいね」

「はい」

そうして歩き始めたとき。

「きゃっ！」

「いつてえ……」

後ろから少年がぶつかってさらに転んでしまっていた。

「大丈夫？」

私はその少年に手を差し伸べたがその少年は私の手を振り払い、
走り去ってしまった。

「あ！ この野郎！ まちやがれ！」

その時なぜか戒がいきなりその少年を追いかけ始めた。

私は事情が飲み込めなかったものの篠山さんに戒を追う事を伝え

て走り出し、少ししてから戒に追いついた。

「急に走り出してどうしたの？」

「あの野郎スリだよ！」

「え？ あんな子供が！？」

そう話している間も足を緩めずに走り続けてあと少しで戒の手が少年に届きそうな……その時。

「こらあああああああああ！！！」

ドスン。

と轟音を立て、砂煙を巻き上げて私達の前に落ちてきた。

そしてその砂煙が晴れ、その中から現れたのは……。

「なに人様からスリなんてしとんねん自分！」

「ロボット！？」

全長三メートルはあろうかと言うほどの巨大な鋼鉄のロボットとその背中にしがみついていた女の子だった。

「お、お姉ちゃん……」

「ほら！ はよ、返しいや！ で、ちゃんと謝るんやで？」

「うん……」

私からスリをした男の子はごめんなさい。と言ってから去っていった。

「これにて一件落着！ やな！」

そしてしがみついていた女の子がそんなことを言っていたが、私は訳がわからなくてただ呆然とするだけだった。

そこに篠山さんが来て、

「瑠璃さん、戒君、ここに居ましたか……と、円さんも一緒ですか」

「え！ 円さんってこんな女の子だったんですか！？」

「お前いったい円がどんな奴だと思ってたんだよ……」

「篠山さんがさん付けするぐらいだから少なくとも私と同じくらいかと……」

そんな話をしてる間に私達に気づいたのか円さんが近づいてきた。
「おお！ 久しぶりやな！ 茂はん！ 戒はん！ で、こっちが……」

…瑠璃はん？」

「あ、うん。そうだけど」

「ふーん……テストやー!!」

「え？ ええ!？」

「まあ、名前は知ってるやろっからこれからうちのことをなんて呼ぶつもりや？」

「ちなみに率直な気持ちで言うんやで？と円ちゃんは付け足したがなんていうかもっ……この身長を見たときから……」。

「えっと、円ちゃん」

「合格や!」

「ホント!？」

「いやぁ……瑠璃はん話がわかつとるやないか！ ほんま、うちの周りにはちゃんと呼んでくれる人がおらんくてなぁ」

「え!？ なんでこんな可愛いのにちゃんじゃないの？」

「やろ？ うちもそれが疑問でなぁ……」

「……俺らがちゃんと呼ばないのが悪いんですかね？」

「……さぁ、少なくとも僕にはわかりません」

そんなこんなの話で私と円ちゃんが盛り上がってから約一時間後ぐらいの頃に。

「さて、そろそろ円さんの家に行きませんか？」

「ん、そやなぁ」

「ほいならトクナガの背に乗って行くか」

「そんなことできるの？」

「うちのトクナガを舐めたらあかねで!」

「ってちよつと待てよ……」

「どうしたの？」

「なんで俺だけハブケなんだよ!」

どうやら戒は自分だけトクナガの背に乗っていけない事を怒ってるらしいが、さすがに理由はわからなかったので円ちゃんの言葉を

待つて、そして円ちゃんはさもなんでもないように言った。

「定員オーバーや」

「嘘付けって！ おい！」

「よっしゃあ！ いくで！」

戒はまだ何か言っていたようだが円ちゃんは気にせずそのままトクナガを起動させジェットと足のばねを最大限に利用して飛び上がった。

そして建物の中から出た瞬間、

「うわあ……」

私は歓喜の声を上げた。

上空に出たときに見えるのは圧倒的までに青い空。

私はこの光景にただ啞然とするばかりだった。

「ん？ ああ！ 瑠璃はん口閉じいや！ 舌噛むで！？」

「え？」

が、喜べたのは一瞬でトクナガは上に飛んだ、いや……跳んだのだから落ちるのは当然のことで口を開けて感動していた私は円ちゃんの注意も空しく、

私は舌を噛んだ。

「うう……いはいよあ……」

「大丈夫ですか？」

「はい……まあそれなりには」

「ならよいのですが」

「ごめんな……瑠璃はん……うちが最初に言わへんかったせいや……」

……

「気にしないでって、ちょっと痛いぐらいだから」

「で？ 武器のことはもう聞いたのか？」

「武器？」

その時私達が着いてからそう経たずして来た戒が聞いたが、まだ言っていないので円ちゃんは疑問顔だ。

「ええ、私達で『ベイメント』と戦おうというので瑠璃さん用の武器を作って欲しいのですよ。」

篠山さんがそういつた瞬間円ちゃんの顔が驚愕のものに変わった。「は！？ たかが三人で『ベイメント』に挑むつもりなん？ 無茶もいいとこやで！？」

「いいえ、三人ではありませんよ。十五年前の知り合いを当てに各地を回って協力を頼みますしそれに」

篠山さんはそこで一旦言葉を区切り円ちゃんを正面に見据えて言った。

「少なくとも円さんは協力してくれるでしょう？」

その言葉を聴いた瞬間に円ちゃんは困ったような顔をして、なにかを考え込んで、最後に呆れたような顔をして言った。

「……………はあ……………ま、あんたらみたいなんをほおっておけへんしな」

「それじゃあ！」

「ええで、うちも手伝ったる……………まあ瑠璃はんと一緒に居たいしな……………」

「ん？ 円ちゃんなにか言った？」

「い、いや！ なんもあらへんで！？」

「素直じゃねえ奴……………」

「うっさいわ！！」

戒には聞こえていたみたいで戒から聞こうとしたのだがどうしても円ちゃんが許してくれなかった。

「いったいなんて言ったんだろ？」

円ちゃんも旅と一緒に来てくれることが決まってから円ちゃんはすぐに私の武器製作に取り掛かってくれたのだけど私は武器みたいな使ったことないんだけど大丈夫かな？

まあ、円ちゃんは任せてって言ったから任せよう。

そして、篠山さんに武器製作は時間が掛かるから先に寝ててくだ

さいといって私と戒は今寝室にいるのだが、

「ちよつと戒！ そんなくつつかないでよ！」

「俺だってこんな貧相な体にくつつきたくねえよ……」

なんて失礼な！ 私だってこう……寄せて上げれば……やめよう、空しくなっちゃった……。

なんか空しくなったら眠くなってきちゃったなあ……寝よう、そうしよう

「なあ瑠璃？」

「どうしたの？ 戒？」

少し眠いけどさすがに無視するのもアレなので少し話を続けることにした。

けど、いったいなんなんだろう？

「お前、これからは戦いの日々になっていくが怖くないのか？」

「……………怖いよ」

こんなことで嘘をついても仕方ないし、なにより戒が心配してくれたことが……嬉しかった。

「そうか」

「ねえ戒、私どうしたらいいのかな？」

「お前は戦う力を持っている」

「そうだよね……」

「だが、最初は戦いに慣れることも出来ないだろうし怖いと思うだから」

私が予想外の言葉に驚いてると戒は一旦言葉を区切り、

「そのときは俺に言え、必ず守ってやる」

「……うん。つと、それじゃ私もう眠いから寝るね」

「ああ、お休み」

私は一刻も話を切り上げたかった。

だって、恥ずかしすぎて……おかしくなりそうなんだもん……。

昨日恥ずかしくてあまり寝れなかった私は朝早く起きてリビング

に行く。篠山さんが料理を作っていた。

「おはようございます。朝早いんですね」

「おはようございます、実は寝てないだけなんですよ」

「そうなんですか？ それなら寝てきてきた方がいいですよ？」

「うーん……ではお言葉に甘えさせてもらいましょかね。それでは料理お願いしますね」

「……………え？ あっ……………はい……………」

私に背を向け円ちゃんが武器を作るために入ってしまった部屋に入っていく。

取り残された私は、

「……………どうしよう」

いつも宿屋のおばさんがすごく美味しい料理を作ってくれるから今まで一度も作ったことがないんだけど……………。

でも篠山さんが頼ってくれたんだ！ がんばろう！

「で、この惨状か……………」

「……………ごめん」

まあ、意気込みだけあっても腕がないから結果としては、

私が作った料理は全滅、あまつさえ油の入れすぎで火事になりそうなほどだった。

戒が起きてこなかったら今頃……………。

そう思うとゾツとする話だった。

「ま、今から俺が作るから十分したら来るように篠山さん達に言ってきてくれないか？」

「え？ 戒って料理できたの？」

「少なくともお前よりかはな」

「うう……………なんかむかつく」

「ほら、とつと呼びにいつて来い」

「はいはい……………」

なんかなあ……………これから私も料理の練習しよっかな。

そんなことを思いつつ篠山さんと円ちゃんがいる部屋の前に行く。
「篠山さん、円ちゃん、十分後ぐらいに出来上がるので来てくださ
い」

「わかりました、私も円さんが元に戻るまで待つてないといけませ
んしね」

「では、十分後に」

そういつて私は戒の所に戻っていったけど円ちゃんが元に戻るつ
てどういう意味だろ？

皆でご飯を食べ終わった後、円ちゃんが私に話しかけてきた。

「なあ瑠璃はん、買い物に行かへん？」

「買い物？」

「そ、ついさつき戒はんから残り食材が少ないことを指摘されてな
あ、せつかくやしと思つてな」

「うーん……まあ円ちゃんと一緒に行くんだつたら楽しいだろうか
らいいよ」

「そか、ほな行くで！」

「うん、じゃ戒、篠山さん、行つてきます！」

私は円ちゃんと食材を買いに行ったりそこに行く途中で見つけた
服屋やアクセサリー屋で恥ずかしがる円ちゃんを着飾らせたりして
今から帰るところだった。

しかしあの時、着替えた円ちゃんはかわいかったなあ……。

そんなことを考え浮かれていたのだけど、その浮かれは次の瞬間
吹き飛んだ。

地面から影のように『ベイメント』が現れたのだ。

「……ッ！ 瑠璃はん！」

「うん！」

私達は距離を取りつつ話す。

「どうする？」

「どうにかこの場さえ乗り切れれば武器を取り行けるんやけどなあ……」

「だよね……どうしょつか……」

どうやって切り抜けるかを二人で考えてると、シユタ！と私達の前に私達の前に何かが降り立った。

そしてその降り立った何か……白いスーツを着た男の人がこちらにゆっくりと振り向き、

「円！ 私の可愛い円よ！ なぜこんな所で『ベイメント』と対峙しているんだ！ 危ないじゃないか！ 円の綺麗な綺麗な珠の肌に傷ができたかどうかするつもりなんだ！」

「うっさいわボケ！」

円ちゃんのハイキックが決まり崩れ落ちる白スーツの人……いったいなんなんだこの人……。

「まったく、瑠璃はんもおるし『ベイメント』と対峙してる時にこんなことしてるんやないで……」

「瑠璃……だと……」

「あ、はい、私ですけど」

「おお！ なんと美しい！ 先ほどは見苦しいところを見せて大変申し訳ありませんでした」

「い、いえ……あまり気にしてませんけど……」

「なんと！ 私のあのような場面を見ても許すその心はまさに玉瑠璃の様に澄んでいて、その肌はどんな宝石にも負けないぐらい美しく……」

話を聞きながらどうしようかと思っていたとき、その人の背後から『ベイメント』が飛び掛った。

しかしその人に凶刃が届くことはなく飛び掛った『ベイメント』は影となって消えた。

「まったく、レディを口説いている最中に邪魔をするとは無粋な連中ですね……しかし、そろそろ時間ですか」

その人が何かを投げる動作を見ると『ベイメント』が次々に一匹、

二匹と死んでいく。

そして私達に振り返り、

「さあ円！　ここは私が受け持ちますのであなたは武器を取りに行きなさい！」

「わかったで！」

円ちゃんは私の手をとって走り出した。

「ちよつと円ちゃん！　あの人置いてって大丈夫なの？」

「大丈夫、やってうちの父さんやもん！」

「ふつ……行きましたか……さて、また口説くためには先にこいつらを片付けないといけませんね」

そういつて白スーツの男……仁王　工機は自分の手に無数の投げナイフを取り出して手に広げ、自分の後ろに向かって手を振り、

「茂、サポートは頼みましたよ」

ここから離れた場所でスナイパーライフルを構えているだろう幼馴染に対し独り言をいい、

「覚悟してください！」

工機は投げナイフを投げ『ベイメント』との戦いが始まった。

私達が円ちゃんの家のだどり着くと玄関前には戒の姿があった。

「ん？　おお戻ったか。ここは俺に任せて早く武器とってこいよ」

「恩に着るで！　さ、瑠璃はんこつちや」

円ちゃんに付いていき部屋の中に入る。

「んで、これが瑠璃はんの武器や！」

「これが……私の武器……」

円ちゃんから渡された私の武器、それは弓と短剣だった。

私に説明してくれた事の要点をまとめるとこの弓は宮ノ坂が代代持っているはずの力を込めると特殊な力を発揮するらしいがまだ私はその力が覚醒してないから使えないとのことだった。

ただ一つだけ篠山さんに宮ノ坂の力の話を聞いたときから疑問に

思っていたことがある。

「ねえ、円ちゃん。宮ノ坂の力っていったいなんなの？」

「それは……」

円ちゃんが口を開き言い始めようとした時、外から激しい戦っているような音が聞こえてきた。

「瑠璃はん！ その武器持って戒はんの手助けに行くで！」

「うん！」

私はさっきまで説明を受けていた弓を持ち短剣を腰に挿して外に出て行った。

外は思ったとおりに戦闘中でざっと敵の数は二十体ぐらいいた。

「戒！」

「瑠璃！ やれるか？」

「大丈夫！ 任せて！」

「あまり気負いすぎるなよ！」

「わかった！」

しかし初めての戦いの上に狭い路地での乱戦だったので私は隙について射って三体倒したところで完全に疲れ果てていた。

「はあ……はあ……」

私は一度立ち止まり大きく呼吸をして息を整えようとした。

しかしそんな隙を見逃してくれるはずもなく、これ幸いとはかりに飛び掛ってきた。

「クッ……！」

私は転がるようにしてなんとかかわしたが、すぐに次の攻撃が来るだろうと立ち上がり飛び掛ってきた『ベイメント』を見据えたが私に飛び掛り避けられたため勢い余って四つん這いになったまま止まっていた。

なぜ止まっているのかわからないまま呆然としていて、

「我、生きるは人の為」

どこかから声が響いて、

「我、殺すは主の為」

その声はだんだんと近づいてきて、

「我、滅すは國の為」

その声の方向には、

「なら汝は何が為に生きる」

戒がいた。

「生きる価値無きその命、死を持って償うがよい！」

そしてそのままギロチンを振り下ろし『ベイメント』は真っ二つに切断された。

「……ふう……」

私は戦いが終わって緊張感から開放されてへたり込んだ。

「大丈夫か？」

戒が私に手を差し伸べてくる。

「うん、ありがとう」

私はその手を取り立ち上がった。

「そういえばさっきのつていつたいななの？」

「ん？ ああ、アレが俺の代代引き継がれている力……ま、端的に言えば敵を五秒だけ金縛り状態にするつてとこだな」

「へえ……つてことは篠山さんや円ちゃんにもそんな感じの力つてあるの？」

「まあな、ただ円の力は厳密には工機さんの力と違うがな。」

「そうなんだ……そういえば円ちゃんは？」

「ん？ ああそういえばいねえな。どこ行ったんだ？」

私と戒は辺りを見回してみるが円ちゃんの姿は見つからない。心配になって探しに行こうとしたその時、

『おう、坊主共無事だったか？』

突然響いたひどく野太い声に私達は顔を見合わせる。

そのとき円ちゃんがトクナガと一緒に上から降りてきた。

「おい！ 瑠璃はん！ 戒はん！」

「あ！ 円ちゃん！」

私達は円ちゃんに駆け寄った。

「円ちゃんどこ行ってたの？」

「ん？ トクナガと一緒にこの家を守つとたで？」

「どこでだよ……」

「屋根の上や」

「……………」

まったく気づかなかった……。

確かに円ちゃんの家は瓦とかじゃなくてビルの屋上みたいな感じだからわからなくもないが……。

「それでな？ 瑠璃はん、戒はん？」

「ん？ どうしたの？」

「トクナガがせっかく心配してくれとんのに無視は酷いんとちゃうかな？」

「……………」

「はあああああああ！？ え！？ はあああああああ！？」

『おいおい、そんなに驚くことか？』

トクナガ？ は呆れたような声を出すが私達は驚きっぱなしだった。

「え！？ だつて円、お前トクナガはロボットつて」

「うんうん、円ちゃんそう言つてたじゃない！」

しかし私達がそこまで言つたところで円ちゃんは腰に手を当て胸を大いに張つて、

「やからうちのトクナガはただのロボットやないってゆうたやんか……！」

『つて、伝わってねえ時点で駄目だろうが！』

ビシッとトクナガは円ちゃんにチョップを入れ円ちゃんは痛かったのか頭を押さえてうずくまったが私達はそんな光景にただ呆然と立ち尽くすだけだった。

一方街に残り戦っていた工機と茂はというと、

「舞い飛べ我がナイフよ！ 敵の体を切り刻め……！」

工機がそついうと同時に工機の回りに歯車の形になるように計算

しつくされて投げられたナイフが周りを飛び交い『ベイメント』の群れを切り刻んでいった。

「ふう……こんなもんですかね。さて麗しい私の円と瑠璃さんはどこにいるんでしょうか！」

そういつてスキップをしながら進み始めていた工機だった。がピタッとして足を止め振り返る。

「巨大種ですか……久しぶりに見ましたね……」

だが工機は巨大種を一瞥すると歩きを再開させる。

「ただ、これはあなたにとって格好の的でしょう？」

そういうかわないかのところで、

タンッ……タンッ……タンッ……。

と渴いた銃声が響き巨大種の頭に三つ穴が開いた。

そして間髪入れずにミサイルが腹に直撃し、無数の弾丸によって手足を削がれていき頭の上に何かが乗り、

「チェックメイトです」

茂はショットガンの引き金を引いた。

そのまま茂るは崩れ落ちる巨大種の上から飛び降りたが何かを踏みつけた。

まあそれは工機の頭だったのだが茂は気にせずに聞く。

「こんな所で何をしているんですか？」

「はははっ……わかってるとは重いますがあなたの撃ったミサイルの爆風のせいで吹き飛んで立ち上がるうとしたところでああなたに上から頭を踏みつけられたのですよ」

「ああ……そういうばそんなこともありましたね」

「とりあえず私の頭の上からどいてくれませんか？」

「なんでですか？ あなたマゾでしょう？」

「わかっていましたがあなたは昔からサドでしたけど……ただ、私はマゾでも男に踏まれて喜ぶマゾではないのです……」

「そうですね、そうですね」

「痛い痛い！ やめてください！ 頭を足でグリグリしないでください！！」

「そういえば工機さん大丈夫かな？」

完全に安心しきっているのかゆつくりと歩いてる戒と円ちゃんに聞いてみたが二人は顔を見合わせ言った。

「茂さんも援護しに行っただろうし大丈夫だろ。二人とも変だけど。」

「そうそう父さんもそれなりに強いしな。二人とも変やけど。」

二人して同じような事を言い切ったことに疑問を覚えたがどうせ知る機会はないだろう……。

………知る機会あったよ。

私達が工機さんと別れた場所にたどり着くと二人して変と言った理由がわかった。

「ははは、なぜ逃げるんです？ 今から楽しいお仕置きタイムだと言っのに」

「だから私は男にお仕置きされて喜ぶような趣味はないんですって！」

「またまた、そんな冗談言わなくていいのですよ？」

「しかも毎度のごとくあなたは人の話を聞きませんよね！？」

「あなたも昔から私に弄られて喜んでるじゃないですか」

「む、昔は昔です！ というか今は喜んでいません！！」

篠山さん……こんなキャラだったんだ……。

私が呆然と立ち尽くしていると左右から戒と円ちゃんが聞いた。

「な？ 変だろ？」

「な？ 変やろ？」

「……うん」

一方工機さんは私達に気づいたのか助けを求めるような顔で急速に迫ってきて、

「おお！ 瑠璃さん！ 戒君！ 円！ お願いですから私を茂から助けてくださいー！」

「えっと……」

私が反応に困っているといつの間にか工機さんの隣にいた戒と円ちゃんが工機さんの両腕を掴み、

「まあ工機さん、いつものことだから諦めてください」

「まあお父さん、いつものことやから諦めや？」

「酷い！ 鬼！ 悪魔！ せめて私の人権を……ヒツ！」

二人が工機さんを捕まえている間に茂さんが近づいてきて工機さんの服の襟を掴み、

「さ、行きますよ」

「だから痛いのはいやなんですってー！」

「そうですか、そうですか」

「ひっ……あっ……だから痛いって……はっっ」

そのまま去っていった……。

「とりあえず社長室で待ってようや？ どうせ戻ってくるならそこやろうし」

「そうだな」

「……………うん」

円ちゃんの前導で私達は社長室に行き待つこと一時間弱で茂さんと工機さんが入ってきた。

茂さんがつやつやとしていて工機さんがゲッソリとしているのにとことなく嬉しそうなのは見間違いだろうか……。

「さて、工機」

「『ベイメント』のことですね？」

「……さすがですね、どうせ私の質問の内容もわかっているのではようっ？」

「ええ、とは言ってもあなたも私の回答がわかっているでしょうに」「そうですね」

「それならなぜ聞いたんです？」

「彼等にも直接伝えたほうがいいと思いまして」

茂さんは私達を見て言う。

「そうですね……」

そして工機さんも……円ちゃんを見てから言った。

「私、仁王 工機は今仁王コーポレーションの社長として『ベイメント』との戦争に関し一切の協力をしないことを宣言します」

工機さんが言った言葉に私達は呆氣に取られていたが一番意外な人物が最初に口を開いた。

「なんでや！　なんで一切の協力ができへんねん！」

それは円ちゃんだった。

円ちゃんは必死に言葉を投げかけるが工機さんはその言葉に少しも動揺せずに言葉を返していく。

「考えて見なさい円、ここ最近この街は度々の襲撃を受けているでしょう？」

「それはそうやけど……でも！　物資の支援ぐらいは……！」

「無理です、この街以外にも『ベイメント』に襲撃されている所は少なくないのです。私はこの地域の支配者として襲撃を受けたところの復興作業を第一として考えなければならなのです」

「でも……こちらが倒せば……」

「十五年前、あれだけの人がいてツートップを失ってなお『ベイメント』は活動が続いています。それを完全に倒そうなど夢幻にすぎません。」

その言葉に反論する言葉がないのか円ちゃんはなにも言えなかった。

だが工機さんは無情にも残酷な言葉を言う。

「そして円、あなたが行くのならあなたは今から私の娘ではなくなったの仁王 円です」

「……ッ！」

その言葉に円ちゃんは今にも泣きそうな顔で下を向き唇を噛み締

める。

篠山さんはこうなることがわかっていたのか平然とした顔で座っている。

私は講義の声を上げようとしたが……私はまだ工機さんのことを理解していなかった。

「ただし！」

私が上げようとした講義の声は工機さんの上げた声によってさえぎられ、工機さんは話を再開させる。

「『ベイメント』を完全に倒し帰ってくるのができたら今から旅出つ仁王 円はまた私の娘となります。」

「え？」

よくわからないといった顔で工機さんを見上げた円ちゃんに工機さんは視線の高さをあわせ、

「ですので、無事に帰ってきてくださいね？」

「お父さん……」

そして工機さんは立ち上がり照れくさそうに誰に言うでもなく、

「ああ……この会社の十周年を記念して私の娘と同じ名前の仁王

円と言う子に特別になにかを送るキャンペーンでもしましょうかね

……」

「お父さん……」

「うわっと……危ないですよ？」

「だって……えへへ……」

少しびっくりしながらも円ちゃんを抱えている工機さんとその腕の中で心底嬉しそうに微笑む円ちゃん。

本当にいい親子だなあ……と思った。

「そういえば茂さんはこうなることわかってたんですか？」

「ええ、あいつのことですから」

「ならなんで教えてくれなかったんですか？」

「だって、黙ってた方が面白いじゃないですか」

「……………」

「やっぱ茂さんか……」
本当にサドなんだなあ……と思った。

あの後工機さんの腕の中で円ちゃんが眠って困ったようにしてたり、武器のメンテナンスをしたり、工機さんが篠山さんに夜通し弄られ続けたりして一夜過ぎで私達は今正門にいた。

「それでは、瑠璃さん、戒君気をつけてください。」

「ありがとうございます」

「俺なら大丈夫ですよ！」

「茂？ 円を頼みましたからね？」

「ええ、あなたこそこの地域の統治。がんばってください」

「円……無事に帰ってきてくれることを信じてますよ」

「うん！ 行つて来るで！」

「それでは……宮ノ坂 瑠璃様、荒尾 戒様、篠山 茂様、仁王 円様。旅のご武運を祈っています。」

『フォードヒルズ』からけつこう歩いたところで篠山さんの発案でちょうどいい高原で野宿をすることにした。

そして円ちゃんが寝てしまったので三人で寝ずの番をすることに
して私が寝ずの番をしている時だった。

「円ちゃん？」

円ちゃんが少しふらふらしながら歩いていることは疑問に思いつけど、ま、大丈夫かな？ 転んだり……

「うにゃあ！？」

したなあ……。しかも妙な声まで上げて……。

けど転んだ以上はおっておけないので私は円ちゃんに近寄って聞いてみた。

「大丈夫？ 円ちゃん」

「うん！ ありがとうございます、瑠璃おねえちゃん！！」

「……………え？」

今……円ちゃん私のこと瑠璃おねえちゃんって呼んだ？

「円ちゃん、もう一回言ってみて？」

「ありがとっ、瑠璃おねえちゃん！！」

「もう一回」

「ありがとっ、瑠璃おねえちゃん！！」

「うん……悪くないかも」

私は今壮絶に顔が緩んでいることだろう。

「瑠璃おねえちゃん、私は寝に行くけど瑠璃おねえちゃんはどつするの？」

「私は寝ずの番をしてるからここに残るよ」

「そうなんだ……だったら私もおねえちゃんと一緒に寝ずの番する！」

「え？ 寝なくて大丈夫なの？」

「だって瑠璃おねえちゃんと一緒に居たいんだもん……だめ？」

円ちゃんが少し潤んだような目で私を上目遣いに見て聞いてくる

……くう……こんな風に言われたら……。

「じゃあ一緒にしようか」

「うん！ 瑠璃おねえちゃん大好き！！」

そうして私達は一緒に寝ずの番をしていたのだが円ちゃんが寝てしまい私は、

「もしかしてこれが篠山さんが言っていた円ちゃんが元に戻るまで……？」

うん……このことは私の胸の奥にしまっておこう。円ちゃんの為にも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7297m/>

ブレイブ・ウィル

2010年10月8日13時39分発行